色彩教材研究会通信　No.400　2024.7.25

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●主査就任のご挨拶

2024 年度色彩教材研究会主査の吉澤陽介でございます。まずは、2023 年度総会から時間が経過してしまい、申し訳ありませんでした。総会を通して主査就任の希望は無く、昨年度主査である吉澤預かりとしておりましたが、この研究会通信をもってスタートとさせていただきます。任期は 2025 年度末までとさせていただきます。

昨年度は，「回転盤ワークショップと関連イベント」「キックオフミーティング」「秋の研究会大会」「試験的色彩教材ギャラリートーク」と複数のイベントを開催することができました。今年度は、11/30（土）・12/1（日）開催の「令和６年度秋の研究会大会（研究発表）」、および３月予定の「色彩教材ギャラリートーク（作品発表）」をメインとして）、試験的な試みも考えております。それらの成果をまずは全国大会に繋げられればと考えております。そして、これからは色彩教材を一般の方にも楽しんでもらえるようなアウトリーチ活動の機会も視野に入れたいと考えております。永田泰弘先生がスタートされた研究会通信を通して、定期的に発信ができればと考えております。お付き合いのほどを、よろしくお願い申し上げます。（吉澤陽介　主査より：001）

●井原西鶴の好色一代男から

「世間胸算用」は没年の前年の西鶴五十一歳の作品である。

この作品の中の、男性の着物、装身具、持ち物などの色名は、「猩々皮（緋）の敷物」、「黒い羽織」「白柄の脇差」、「玉むし色の羽織」、「ぎんすすたけの羽織」、「白小袖」などが見られて、随分派手な光り物の羽織が登場する。

女性の着物、装身具、持ち物などの色名には、「本紅（ほんもみ）の二枚がさね」、「白ぬめの足袋」、「墨染の麻衣」、「やなぎすすたけ」、「もえぎ色に」、「うらはうす紅にして」、「黄がら茶」などの表現が使われている。

人の肌色表現には、「赤面して」、「かほ赤くして」、「首すじの白い」、「かかも色じろ」などの表現が見（やまと）られる。

自然描写では「足もとの赤いうち」、「雲の黒き」などの表現がある。

その他の表現では、「黒米」、「赤米」、「渋墨の色付板」、「紅ぎぬにて張りぬきにして」、「白紙人形」、「あたまの黒いねずみ」、「青苔」、「青竹」、「朱雀の細道」、「黒白の鬼」、「赤いわし」、「赤ねの染入」、「しら土の軒」、「墨絵」、「白がねは雪のごとし」などの色表現が見られ、この浮世草子のような大衆向けの本に現れる色彩表現の時代であった。　（永田泰弘）

●大辞泉ひろいよみ　66 ーく

くろかげ：黒鹿毛。馬の毛色の名。黒みを帯びた鹿毛。

くろがし：黒樫。黒橿。樹皮が黒いカシの総称。イチイガシ・アラカシ・ツクバネガシなど。

黒頭：くろがしら。能で黒毛の頭。鬼畜、男の怨霊などに用いる。狂言でも牛・馬・犬・幽霊などに使う。赤頭／白頭。

くろがね：黒い金属の意。鉄のこと。

くろがまえ：黒構え。昔の築城法の一。城内が見えないように土居を高くした構え。

くろかみ：黒くて艶のある髪。髪の美称。

くろかわ：黒色に染めた革。藍で濃く染めた革。

くろかわおどし：鎧の威の一。藍で濃く染めた黒革で威したもの。

くろき：黒木。古くは「赤木」に対して、のちには「白木」に対して、皮のついたままの丸太。約 30 センチに切った生木をカマドで黒く蒸し焼きにして売り物の薪にしたもの。

くろき：黒酒。新嘗祭などで白酒と共に神前に供える黒い酒。

くろぎぬ：黒衣。黒色の衣服。律令制では家人・奴婢の衣とされる。喪服。ふじごろも。くろききぬ。くろぐ（黒具）。

＊大辞泉：小学館発行国語辞典　（永田泰弘）